

史実のファウストとその伝説形成

精 園 修 三

はじめに

1587年10月に、フランクフルト・アム・マインのヨハン・シュピース書店から、「悪名高き魔術師・呪術師ヨハン・ファウスト博士の物語」⁽¹⁾、通称「民衆本ファウスト」又は「ファウスト本」と呼ばれる書物が出版された。作中の主人公は約半世紀前には実在し、その後、彼に関する逸話や物語が口承で流布していたのを、無名の編者が収集して、一冊の書物にまとめたのである。この書物の人気はすさまじく、年内に5版を重ね、数年後には改作版、翻訳版を次々と生み出していった。ドイツ文学史上低迷の時代の一つである16世紀に、ドイツ固有の文学素材が生まれ、はぐくまれていたのである。事実、ファウストとそのモチーフは、その後続く戦乱と文化的停滞の時代にも生き続け、18世紀以後、レッシング、ゲーテ、グラッベ、レーナウ、ハイネ、トーマス・マン等の手によって文学化された。ファウストは、今ではドイツ民族の枠を越えて、世界的な人間像にまで高められているし、この素材が時代の推移の中で、いかに結実したかをみることによって、ドイツ精神史の流れを辿ることも出来る。その前段階として、この小論では、ファウスト源像の発生的意義を解明するため、史実のファウストにさかのぼってその人となりを追究し、その彼が伝説化され、「民衆本ファウスト」に文学化される過程を、当時の資料を参考にしつつ考察してみたい。

史実のファウストに関する資料

史実のファウストに関する本格的調査研究が始まったのは、19世紀に入ってからである。「民衆本ファウスト」出版後の百数十年間、ドイツではめぼしいファウスト文学が生まれなかった。30年戦争によるドイツ国土の荒廃が文化の面でも停滞をもたらしたからである。その間、ファウストは旅役者が演ずる芝居、人形劇、低俗本の中で生きていたが、その内容は多分に喜劇化され、主人公は道化にまで下落していた。そして、ファウストは単なる空想上の人物、又は別人物の転化、例えば印刷術を実用化して、筆写生の憎悪をかったヨハネス・フストの転化したものと考えられていた。しかし、18世紀の後半、レッシングやシュトルム・ウント・ドラング期の作家によるファウストの文学化、とりわけゲーテの「ファウスト」の成功が、史実のファウストに対する関心をたかめ、これを契機に古文書による調査研究が始められた。その結果、1910年にペッチは「ファウストが史実の人物であったことを今日もはや疑う人はいない」と断言し⁽²⁾、1959年にヘニングは「(ファウストに関する)我々の知識が根本的に変えられることはもうあり得ない」と極言している⁽³⁾。しかし、だからといって、史実のファウストの人物像が明確になったというのではない。その人物の詳細については依然不明確なままである。ほぼ出尽したと思われる資料を検討した後は、推測にたよ

る外はない。

ファウストが実在の人物であったことは、当時書かれた文書によって証明される。こうした文書の中から、まず、3通の公文書によって彼の実在を確認し、つづいて、彼に言及している私文書、すなわち著書、手紙、日記等を通して、彼の人物像をうかがってみる。そして、史実のファウストに出来る限り近づくために、彼が存命中に書かれた文書に限定し、それらを年代順に挙げる。この際、ファウストの存命期間は1480年頃から1540年頃までとするヘニングの説に従う。

(1) バンベルク司教ゲオルク3世の会計長ハンス・ミュラーは、年間会計簿の雑費の項に、1520年2月12日付で次のように記入している。

「同じく10グルデンが哲学者ファウスト博士 (Doctor Faustus philosopho) に贈与さる。(彼は) 殿下に星占い天文図を作成し、天文学者らしく日曜日に占った。(10グルデンの贈与は) 殿下の命令による」⁽⁴⁾

(2) インゴールシュタット市参事会議事録は、1528年6月17日付で次のように記録している。

「1528年聖フェイト祭の後の水曜日に、例の予言者は市を立ち退き、どこかほかの所で暮らすように命令された。」

そして「追放者の名簿」の中には次のように書かれている。

「ハイデルベルクのヨルク・ファウスト博士 (Doctor Jörg faustus von Haidlberg) と自称する男は、市外退去を求められ、彼はこの命令を当局に対して守ることを誓約した。」

(3) ニュールンベルク市参事会決議は、1532年5月10日付で次のように記録している。

「有名な男色家にして降霊術師、ファウスト博士 (Doctor Fausto) に護送権を拒否すること。新市長」

以上のほかに、やはり公文書でありながら、我々が問題にしているファウストと同一人物の資料か否かをめぐってしばしば議論されるのが、ハイデルベルク大学の学生名簿である。そこには、マインツ教区ジンメルン出身のヨハネス・ファウスト (Johannes Faust de Symmern) なる男が、1505年12月3日に入学を許可され、1509年1月15日に16人中首席で人文学部の学士号 (baccalauratus) を与えられたと記録されている。しかし、我々が問題としているファウストの名前が当時の資料で言及される場合は、いずれもゲオルク (Georg = Jörg) であり、ゲオルク・ファウストの推定年令とヨハネス・ファウストのそれが合致せず、その上、ファウスト姓は当時それ程まれではなかったらしいことから、別人説がほぼ定説化している。ヨハネス・ファウストという名前は、「民衆本ファウスト」からゲーテの「ファウスト」に至るファウスト文学で定着してしまっているが、その名前がファウストに関する資料で初めて現われるのは、メランヒトンの談話をマンリウスがまとめた「対話集」(資料12) においてであり、これはメランヒトンの別人混同と推測されている。メランヒトンは1509年1月1日にハイデルベルク大学へ入学したが、これはかのヨハネス・ファウストが卒業する2週間前のことである。新入生のメランヒトンは間もなく行われた卒業式で、首席で

学士となったヨハネス・ファウストの名前を記憶にとどめた可能性は十分ある。そして、後年ドイツ各地で活躍する魔術師ファウストの名前を聞き及んだ時、ゲオルグ・ファウストをかんの先輩ヨハネス・ファウストと混同したのだと思われる。

なお、この記録以外には、ファウストの名前はドイツのいずれの大学学生名簿にも見出されない。

(4) 史実のファウストに関する資料で、最も古く、また詳しく人物描写を行っているのが、ヨハネス・トリテミウスの手紙である。彼はシュポーンハイムの僧院長で、ドイツ皇帝から意見を求められたこともある人物であり、魔術に関する著書も残している。彼はハスフルトの数学者ヨハン・ヴィルドングに宛て、1507年8月20日付で次のように書いているが、これは近日中にファウストの訪問を受ける予定のヴィルドングがトリテミウスにその人柄を照会したのに対する返書である。

「あなたが私に照会してこられたあの男、厚顔にも自ら降霊術師の王と名のっているゲオルグ・ザベルリクスは、浮浪者、じょう舌家、無頼漢で、もうこれ以上、公の場で忌わしいこと、反教会的なことを云わないよう、むち打って追放するに価します。何故なら、彼が不そんなにも称している肩書きは、最も愚かにして間違いじみた精神の印にほかならず、彼が馬鹿者であって、哲学者ではないことを示しているのではないのでしょうか。彼は次のような自分に都合のよい肩書きを並べていました。『修士ゲオルギウス・ザベルリクス・ファウスト・ユニオール (Magister Georgius Sabellicus, Faustus iunior), 降霊術師の総本家, 占星術師, 第二位の魔術師, 手相見, 天文予想師, 火占師, 第二位の水占師。』この男の馬鹿げた厚かましさをご覧下さい。自ら降霊術師の総本家を名のるとは、どういう間違いざたでしょう。本当は学問不案内な者なのですから、修士ではなく、愚者と名のるべきだったでしょう。私はこの男の愚行を知っております。私は昨年マルク・ブランデンブルクから帰る折、ゲルンハウゼン市の近くでこの男に出会いましたが、そこの宿でこの男が厚かましくも行ったやくざなことどもを沢山耳にしました。しかし、彼は私が滞在しているのを聞くや否や、宿から逃げ出し、私に会うよう皆に説得されてもききませんでした。

先程申し上げた、彼の馬鹿さかげんを示す名刺は、彼が一市民の手を通して私に届けたものです。その町の僧侶達から聞いたところによりますと、彼は大勢の人達の面前でこう云ったそうです。自分はあらゆる学問を学び、記憶したので、たとえプラトンやアリストテレスの全作品が、その哲学共々人類の記憶から消えたとしても、自分はヘブライ人エスラの如き天才的才能によって、以前同様すべてを立派に復元してみせようと。その後、私がシュパイエルに滞在しました折、彼がヴィルツブルクへやって来て、大勢の人達の面前で、例の如くうぬぼれながらこう云ったそうです。救世主キリストの奇蹟的行為は驚くに価しない。自分だってキリストが行ったことすべてを、何時でも、何度でも行うことが出来るのだと。今年四旬節の終り頃、彼はクロイツナハへやって来て、同じような大言をろうしつつ、とんでもないことを自慢して云ったそうです。自分は錬金術にかけては、今迄に存在した例がない程の達人で、皆の衆が望むことは何でも実現出来るのだと。この頃、上述の町の校長職が空席でしたので、フランツ・フォン・ジッキンゲン、あなたの領主の管領で、神秘的なことにはとりわけ好奇心の強いこの男の斡旋で、彼に与えられました。ところがその後間もなく、彼は子供達を相手に恥ずべき非行をやらかし、事が明るみに出て罰せられそうになると姿を

消しました。以上が、その到着をあなたが待ち望んでおられる男について、私が確実な証拠に基づいて申し上げることです。彼が現われましたならば、あなたは彼の中に哲学者ではなく、とてつもない高慢さにとりつかれた男を見出されることでしょう。」

この手紙の主観的筆致はさておき、問題となるのは再びファウストの名前である。「ザベルリクス」は名前の一部なのか、ほかの意味をもつのか、また「ファウスト・ユニオール」（若ファウスト）は老ファウストの実在を意味するのかどうか、納得できる説明はまだ為されていない。

(5) コンラードウス・ムチアヌスは当時のドイツ人文主義を代表する人物であるが、1513年10月13日付で、ゲオルゲンターラー僧院の教師ハインリヒ・ウラーヌスに次のような手紙を送っている。

「一週間前、ハイデルベルクの半神ゲオルギウス・ファウストなる手相見がエルフルトへ来ましたが、全くのほら吹きで、愚か者です。彼の術なるものは、すべての占師の術同様でたらめで、その顔付は無頼漢のそれに似ています。無知な人達はそんな彼に驚嘆しています。神学者達はロイヒリンをやっつけたりしないで、この男に対して立ち上るべきです。私はこの男が旅館で大言壮語しているのを耳にしましたが、彼の嘘言を罰しませんでした。だって、他人の愚劣さが私に何のかかわりがあるのでしょうか。」

(6) マウルブロン修道院長ヨハネス・エンテンフスの覚書によれば、彼の在任中（1512～1518年）に、ファウストなる人物が当修道院に滞在したことを書き留めている。

(7) レープドルフの修道院長キリアン・ライブの天候日記によれば、ゲオルギウス・ファウストスなる人物が1528年6月5日に予言を行ったことを書き留めている。

(8) チュービンゲン大学教授ヨーアヒム・カメラーリウスは、1536年8月13日に、ヴィルツブルクの市参事会員ダニエル・シュティパーリウスに手紙を出し、その中で、ファウストがドイツ皇帝カール5世とフランス王フランツ1世との戦争の成り行きをいかに予言しているか照会している。

(9) 詩人ウルリヒ・フォン・フッテンの従兄弟フィリップ・フォン・フッテンが、南米ヴェネゼラから1540年1月15日に、ヴィルツブルクの兄に送った手紙によると、旅行に出発する前（1534年）、ファウストはこの旅行を凶と、資料(8)に登場するカメラーリウスは吉と予言した。フィリップによればファウストの予言は正しく、兄の帰国要請をいれないのも、ファウストの予言に従うからだとして述べている。

(10) ウォルムスの医師フィリップ・ベガルディは、1539年1月に、「養生録」(Index sanitatis)なる著書を出版した。これは健康法を説いた書物であるが、その中で、彼は良い医師と悪い医師の存在を述べ、後者の例としてファウストを挙げている。

「もう一人の有名な男についてお話ししましょう。私は彼の名前を挙げないでおこうと思いましたが、彼のほうで名前を挙げられず、無名であることを欲しません。何故なら、彼は

数年前程んと全国、公領や王国を遍歴し、その名を万人に知らしめ、その特技、医術のみならず、手相術、降霊術、水晶球による幻像術、その他同じような諸術を高らかに自慢したのですから。しかも、自慢したばかりでなく、自分が有名な熟達した名人だと自称していました。彼は自分がファウストだと云って否定せず、同時に、哲学者中の哲学者だと云っていました。しかし、彼にだまされたと云って何人の人が私に訴えたでしょうか、その数は大変なものでした。とにかく、彼の約束ごとはテッサルスの如く大きく、彼の評判もテオフラストスの如く大きなものでした。ところが、実行の段になると、私を見る限り、僅少で、嘘だとわかりました。しかし、彼は金をふんだくこと、(よく云えば)受けとること、そしてその後姿を消すことを怠りませんでした。彼は、私が申し上げる如く、多くの人達にかかるとで祝福したのです。しかし、そのために何が為されるべきでしょうか。過ぎたことは過ぎたことです。私はそれをそのままにしておこうと思います。」

史実のファウスト

以上の資料を一読すれば、史実のファウストは、ゲーテのファウストによって与えられる印象を、大幅に訂正せざるを得ない人物だったことがわかる。なるほど、彼が庶民の間で得た評判は相当なものだったらしい。しかし、本人が一流の魔術師を主張しているにも拘らず、当時の知識人は口をそろえてそれを否定し、代りにペテン師、ほら吹きとの名称を与えている。資料を残したのが概して彼に反感をもつ知識人であり、彼に好感をもっていた庶民は資料を残していないというハンディは確かにある。しかし、いずれにせよ、次のことだけは明白である。すなわち、史実のファウストには彼の死後噂されたような悪魔との結託とか、それを匂わせる超現実的な内容の報告は皆無だということである。歴史的事実に基づく伝説は、その事実に近づけば近づく程単純な形になるという定説は、ファウスト伝説にもあてはまる。

ここで、既出の資料に基づいて、史実のファウストをまとめると、次のようになる。彼の名前はゲオルグ・ファウストである。彼の生年月日、生地、家庭環境等に関する公式の資料は残されていないが、彼の死後に刊行された文書も参行にすれば、1480年頃バーデン州のクニットリンゲンで生まれ、1540年頃、すなわち、60才ぐらいの時にブライスガウのシュタウフェンで死亡した。彼の主たる交際範囲からして、恐らく農民の出身であろう。彼の名前に付されていた博士号は根拠がない。彼が印した足跡の広さからして——それはこれまでの資料からだけでも、中部・南部ドイツのほぼ全域に及んでいる——彼は遍歴学生に混じって各地を放浪し、彼らとの交際によって学問的知識を身につけたらしい。確かに、彼は自然科学、医学の分野で、ある程度の知識をもっていたと考えられる。その上、彼は巧みな話術を駆使したらしい。彼は弁舌巧みに市井の人達の注意をひき、自分の学問的知識を最大限に利用しつつ、現代の手法のたぐいで相手を暗示にかけ、信用を獲得するという催眠術的能力をもっていた。やがて、彼は当時流行の職業である魔術師、占星術師として予言を行い、一般庶民の間で名声を博し、一部の上流階級でもかなりの評判を得た。しかし、知識階級における彼の不評は覆うべくもない。批判する当事者が魔術を業とする場合は、同業者の成功に対する嫉妬が原因とも考えられるが、そうとは考えられない証言がある。恐らく、ファウストのスタンダード・プレー的な言行が真面目な学者の間で、彼の瀆神的な言行が宗教関係者の間で

反感を買ったのであろう。

史実のファウストに対する諸家の評価に、ある程度の幅があるのはやむを得ない。しかし、その振幅はかなり大きい。彼を一介のいかさま師の人間とする旧来の見解は、シェーラー以来絶えることなく続いている⁽⁵⁾。その流れをくむポイトラーは次のように述べている。「彼は程度の低い占星術師にすぎず、藪医者で、ほら吹きと詐欺師の合の子で、どこにも定住できずに各地を転々とし、捕吏の目を逃がれ、町から追放され. . .。」⁽⁶⁾しかし、最近になって、史実のファウストを学識ある、非凡な人物と評価する見解が現われている⁽⁷⁾。彼を時代の偏見にとらわれない、それ故に、当時の社会体制からはみ出し、迫害されることになった進歩的自由思想家とみるのである。そして、後者の見解が次第に優位を占めつつあるのが現状である。こうした見解をもつ一人であるヘニングは次のように述べている。「ファウストは、アグリッパやパラケルズスのような人達の哲学的、自然科学的意義を極めなかったけれども、今日我々は、彼が今迄絶えず主張されてきた如き、ありきたりの香具師ではなかったと云うことが出来る。ファウストは当時の手品師、遍歴学者、自然哲学者の中間的位置を占めている。」⁽⁸⁾

ファウスト伝説に関する資料

史実のファウストがいかなる人物であったにせよ、彼の名前は忘れられず、彼の死後、或いは既にその晩年から、さまざまな逸話と共に語り継がれていった。その模様は、やはり当時書かれた文書によってうかがうことが出来るので、それらの中から主な5資料を選んで、年代順に挙げる。これらの逸話が一括してファウスト伝説と総称され、1587年の「民衆本ファウスト」に集大成されるのである。

(11) バーゼルの新教派牧師ヨハネス・ガストは、1548年に「宴席対話集」(Sermones Convivales)を刊行したが、その中の二ヶ所でファウストに言及している。この著書は、ファウストが悪魔の化身を同伴していたこととか、彼の不審死に初めて言及した資料である。

「〔降霊術師ファウストについて〕ある時、彼は大変裕福な寺院に立ち寄った。そこで泊るためだった。修道士が彼にありきたりの、水っぽい、あまいおいしくないワインを出した。ファウストは修道士に別の樽からもっとおいしいワインを、お偉方に出すことになっているワインをくれるように頼んだ。それに対して、修道士は『鍵をもっていない。院長は就寝中で、起こすわけにはいかない』と云った。ファウストが『鍵はあそこの隅にある。それで左側のあの樽をあけ、一杯もってきてくれ』と云った。修道士はそれを拒んで、『私はお客に別のワインを出す許可を、院長から得ていない』と云った。ファウストはこれを聞くと、『客あしらいの悪いお前には、近いうちに不思議なことを体験させてやろう』と怒って云った。翌朝、ファウストは挨拶もせず立ち去り、そして、その寺院に暴れ悪魔を送り込んだ。その悪魔は日夜騒ぎ廻り、礼拝堂、僧房を問わず一切切を動揺させたので、皆の者が何をしようにも落ち着くことが出来なかった。遂に、その寺院を立ち退くか、打ち壊すかの相談がなされ、起った災難の次第はパルト伯爵に報告された。伯爵はその寺院を引き受けることとし、僧侶達を立ち退かせて年俵を与え、外の者達は手元においた。今でも、僧侶がその寺院に入ると、ものすごい騒音が起こるので、住民達は落ち着くことが出来ないという話

である。こうしたことが出来るのはサタンである。」

「(ファウストの他の例) 私がバーゼルで、彼とある大きな神学校で食事をした時、彼は料理人にさまざまな鳥を、当時バーゼルでは売っていなかったのもので、どこで買ったのか、誰からもらったのかわからないような、しかも、この地方では見たこともないような鳥を与えた。彼は犬と馬を連れていたが、それらは、私が信ずるところでは、悪魔であった。何故なら、それらは何でもすることが出来たから。噂によると、犬はときどき召使の姿をして、彼に食事を運ぶそうである。このあわれな男は悲惨な死をとげた。何故なら、悪魔が彼を絞殺したからである。彼の死体は台の上で5回仰向けにされたにも拘らず、どうしてもうつ伏せになった。」

(12) ヨハネス・マンリウスが1563年に刊行した「対話集」(Locorum Communium Collectanea)には、1550年から1560年頃のメランヒトンの談話として、ファウストに関する話ののせられている。この著書で初めてヨハネス・ファウストなる名前が登場することは既に述べた。

「私はクントリング出身のファウストなる男を知っている(クントリングは私の故郷からさほど遠くない田舎町である)。この男はクラカウ大学に入り、魔術を学んだ。以前当地では、魔術が大流行し、公然と教えられていたのである。彼はあちらこちら至る所へ放浪し、口にしてはならないことを口にした。彼がヴェニスで見せ物をやろうとした折、空を飛んでみせようと言った。すなわち、悪魔が彼を空中に持ち上げたのだが、悪魔は彼を地面に落したので、大怪我をして、もう少しで死ぬところだった。しかし、彼はなんとか生きながらえた。数年前、このヨハネス・ファウストが死ぬ前日、彼はヴィルテンベルク地方のある村で悲しそうな顔をして座っていた。宿屋の亭主が、普段と違って沈んでいるのは何故かと尋ねた(と云うのは、彼は普段は全く恥知らずな放蕩者で、極めて不道徳な生活を送っていた。それ故、彼は密通のため命を落しそうになったことも数回あった)。すると、彼は亭主にこう言った。今晚何か物音が聞えるかも知れないが、驚かないで欲しいと。夜半に家の中で大きな物音がした。朝になってもファウストは起きてこなかった。昼も近くなって、亭主は数人の男を連れて、彼の寝室へ行ってみた。その中で彼は倒れ、床のそばで死んでいるのが見つかった。悪魔が彼の首をねじったのだった。存命中、彼は二匹の犬を連れていたが、この二匹の犬は悪魔だったのだ。この点、魔法の無益さに関する本を書きながら、悪魔である犬を一匹いつも連れていた例のならず者とそっくりである。このファウストはヴィテンベルクで、敬虔にして高潔な領主ヨハネス公が彼を捕える命令を出した時、すばやく姿を消した。同様に、彼はニュールンベルクでも逃亡したことがある。……」

(13) ツインマー伯年代記(Zimmernsche Chronik)の中でも、二ヶ所でファウストが言及されている。その部分は、フローベン・クリスティアン・ツィンマー伯の談話をヨハネス・ミュラーが書き留め、手写本にしたのが1564年から1566年にかけてのことであるが、永年の間死蔵されて、刊行されたのは1896年のことである。この年代記は、当時の世間の噂を客観的に伝えているのが特長である。

「しかし、こうした術を行うことは、神に対する冒瀆であるばかりか、極めて危険なことであることは否定出来ない。何故なら、それはかの有名な魔術師ファウストの身に起ったこ

とで明らかだからである。この男は存命中幾多の奇怪なことを行った後——それについては特別の論文が書けるであろう——結局、老令になってブライスガウのシュタウフェンで悪霊に殺された。」

「その頃（1541年頃）、ファウストはブライスガウの小都市シュタウフェンか、その近傍でなくなった。彼は存命中当代ドイツでは見られない程特異な降霊術師で、あちこちで幾多の奇怪なことを行ったので、彼のことは永年容易には忘れられなかった。彼は老令になり、悲惨な死をとげた由である。多くの人達があらゆる種類の証拠や推測から、彼が生前従兄弟と呼んでいた悪霊に殺されたと思っている。彼が残した書物は、彼が死亡した領地の主、シュタウフェン公の所有に帰し、その後多くの人達が、私の考えでは、危険で縁起の悪いその宝物、遺産を得ようとした。」

(14) ヨハネス・ヴィエルスは1568年に刊行した「悪魔の幻術について」(De Parestigiis Daemonum) 第4版の中で、ファウストに関する一節を書き加えた。ヴィエルスは当時各地で行われていた魔女裁判を批判した数少ない人の一人だが、彼も悪魔の存在は信じていた。この資料で報告される内容は、既に物語として完成しており、事実、「民衆本ファウスト」の中の一章として、程んとそのまま収録されている。

「クントリング市生まれのヨハネス・ファウストはクラカウで魔術を学んだ。当地では以前、魔術が公然と教えられていたのである。彼は1540年以前の数年間、多くの人達に驚嘆されながら、嘘言とさまざまな欺瞞でもって、ドイツのいろいろな土地で魔術を行った。でたらめな広言と約束で彼は何でも出来た。私は読者に彼の術の実例をお話するが、条件として、それを真似しないよう約束して下さらなければならぬ。

ある時、この男が悪事を働いて、モーゼル河畔にあり、ゲルデルン公領に接したバットブルクで、ヘルマン伯爵不在中に逮捕された折、当地の司祭で、ヨハン・ドルステニウスという正直だが単純な男が彼に大変厚意を示した。それというのも、ファウストは彼に特技のいくつかを教え、彼をすばらしい達人にしてやろうと内緒で打ち明けたからである。彼はファウストが大変酒好きであるのを知ると、ファウストに長期間ワインを提供し、そのために樽の中身は次第に減って、とうとう空になってしまった。魔術師ファウストがこのことに気付き、また、司祭がグラウエンへ行っ、ひげをそらせようと思った時、ファウストは、もしワインをもっとくれるなら、かみそりなしで、ひげをきれいにそる術を教えてやろうと云った。司祭が即座に承諾したので、ファウストは彼に直ちに薬屋で砒素を買ってきて、ひげやあごに十分すり込むように命じたが、事前に外の添加物を混ぜて調合せねばならぬことをすっかり忘れた。司祭が云われたとうりにするや否や、彼のあごはひりひりと焼け始め、ひげが脱落したばかりか、皮膚が肉もろ共にはげ落ちた。このいたずらは、司祭自身が私に一度ならず、常に興奮して話したものである……結局、ファウストはヴィルテンベルク公領のある村で死に、床のそばで首がねじれているのが見つかった。その前の真夜中、家は震動したそうである。」

(15) レルヒアイマー・フォン・シュタインフェルデンは、1586年に刊行した「魔術についてのキリスト教的考察と警告」(Christlich Bedenken und Erinnerung von Zauberey) の中で、ファウストに関するいくつかの逸話を報告している。それらの逸話と同じ内容の話が

「民衆本ファウスト」に収められているが、この書の出版が「民衆本ファウスト」出版の前年であるため、後者が前者に拠ったのか、別の資料によるものかは定かでない。逸話の一つは次のようなものである。

「クニットリンゲンのヨハネス・ファウストがM地の宿屋で行ったいたずらは、有害ではないけれども罪深いものである。彼はそこで数人の者達と一緒に腰掛け、ザクセン人や外のドイツ人の習慣どおり、何杯も飲んでいて。さて、宿屋の若者が彼のジョッキだか、グラスだかになみなみとつぐので、ファウストは若者をしかり、二度とこんなことをしたら食べてしまうぞと脅した。若者はファウストをせせら笑い、どうぞ食べて下さいと云って、またもやなみなみとついだ。そこで、ファウストは口をかついて彼を食い、冷水の入ったバケツをつかんで、うまいものを食べた後は飲物がいいと云って、その水を飲んだ。亭主はファウストに、下男を返してくれ、さもなければ、どうしたらいいのか知りたいと一生懸命頼んだ。ファウストは亭主に落ち着くように云って、ストーブの後ろを見た。そこには若者が恐怖に震え、ぬれぬずみになって倒れていた。悪魔が彼をそこへ倒し、水をかけ、見ている人達の目をたぶらかしたので、彼は食べられたと思われたのだ。」

なお、別の逸話の末尾には次のように書かれている。

「……彼（ファウスト）はその悪魔に24年間奉仕された後、惨殺された。」

ファウスト伝説の形成

以上の資料により、ファウストが1540年以後、次第に伝説上の人物として定着していった過程がうかがわれる。伝説のファウストは、史実のファウストが希望したとおり、神秘的な人物となり、話題の焦点は彼の魔術におかれている。そして、これらの逸話が「民衆本ファウスト」に集大成されるまでには、伝説形成の常として、史実のファウストの言行が誇張されたものの外に、同時代の他の魔術師、更には過去の魔術師の伝説をも併合して成長するのだが、この点については、別の項で再度言及したい。

ところで、伝説のファウストが史実のファウストと最も異なる点は、彼が悪魔と結託した魔術師となったことであり、その死は悪魔に連れ去られたとされたことである。その根拠として、生前の彼にまつわる超現実的な事柄がいくつか挙げられているが、彼の不審死が伝説形成を促進する一助となったことも疑えない。ファウストの死については、彼が頸骨を折って死亡した点でほぼ一致している。夜半に大きな物音がしたとか、悲惨な死に様だったという報告は、今日、化学実験中の事故死と推定されているが、当時は原因不明の不審死として噂をよんだことであろう。この時点で、新教派グループの作意が働いた、すなわち、ファウスト伝説はもっぱら彼らの創作であるとするのが、ライマンやポイトラーの見解である⁽⁹⁾。新教派グループは、かねがねファウストの無神論的言行に反感を抱いていたので、神を離れた男の末路を示す好例として、彼の不審死を利用したと云うのである。なるほど、こうした発言が、ガスト、メランヒトン、ヴィエルス等、新教派の人達から出ているのは事実である。しかし、彼らのファウストに関する報告は、報告者自身認めている如く、巷に流布していた噂を書き留めたものである。恐らく、彼らはその際自己の考えも付け加えたであろう。伝説というものは、ある特定人物の独創によって作られるものではなく、その時代を共に生きた一般庶民の心情を反映して生まれ、育てられるという定説に従うならば、知識人に書き留め

られる前の逸話の姿が問題である。

ここで、既出の資料を再読してみると、そこで語られる内容は、まず第一に、ファウストの魔法行為——具体的なものとして、冷遇された修道院へ悪魔を送り込む話、不思議な鳥の話、空中飛行の話、司祭のひげを砒素でそる話、宿屋の若者を食べる話等——についてであり、次いで、ファウストの悲惨な死についてである。その外に、ファウストの経歴、ファウストが同伴していた犬や馬、ファウストの遺産について語っている資料もあるが、最初の二つについてはどの資料も触れている。そして、詳細での差違と、語られる順序を度外視すれば、そのいずれにもある共通のパターンを見出すことが出来る。すなわち、ファウストの魔術行為——そして、これは報告者の評価では悪行であるが——の紹介、それが悪魔の助力によることの指摘、最後に、悪魔によるファウストの悲惨な死である。その際、奇異に感じられることは、ファウストの悪行なるものが決して極悪非道な犯罪人の行為ではなく、むしろ、いたずら者のそれに近いことである。しかし、その行為が悪魔の助力によるが故の断罪である。もちろん、当時の考え方では、悪魔との結託は何物にも優先して断罪の決め手となった。こうした筋の運びは次のことを推測せしめる。すなわち、新教派グループは巷に口承で流布しているファウスト逸話を利用して、悪人話を作り上げる意図をもった。魔術師としてその名を知られつつあったファウストには、彼の悲惨な死が悪魔との結託に起因すると強調するだけで、十分受け容れられた。逸話の内容、すなわち、ファウストの悪行なるものはそのまま採用された。と云うよりも、ファウスト逸話はその内容の改変を許されぬ程、既に、庶民の間で定着していたのであろう。こう考えて、新教派グループに潤色される前のファウスト逸話を再現してみると、それはテイル・オイゲンシュピーゲルからジンプリチシムスに至る悪漢物語 (Schelmengeschichte) と同じ系列に属するものであることがわかる。そして、この傾向は「民衆本ファウスト」の中で一層顕著になる。ファウスト伝説が集大成された「民衆本ファウスト」の主人公は、いたる所でさまざまな悪行を行う。それが悪魔との結託によるが故に断罪されているものの、その悪行は決していたずらの域を越えるものではない。では、既にもてきた史実のファウストから、逸話に現われる悪漢ファウストへの変化は何を意味するのであろうか。この逸話を生み出した一般庶民の意図は何であったのだろうか。これを理解するために、少し当時のドイツの社会情勢をふり返る必要がある。

16世紀のドイツは変動の時代である。まず、15世紀にイタリアで始まったルネッサンスが、15世紀末から16世紀にかけて、ドイツにも影響を及ぼす。ルネッサンスは目を中世から古典古代に向けて、新たな人間復活をうたう文化運動であるが、ドイツでも人文主義者達の活動により、近代的な世界観がひらかれる。次に、ルターの「95ヶ条の意見書」に端を発する宗教改革は、旧教に対立する新教を生む。宗教改革自身は個人尊重の思想に基づくルネッサンス運動の一環であり、元来純然たる教義上の問題であった筈だが、新教側が時の政治権力を握る王侯や、新興市民階級と結んで勢力を上げたため、これに伴う争乱は17世紀半ばまで断続的に続く。最後に、当時の西欧では共通した社会変動が起っていた。すなわち、中世社会から近代社会へ、封建主義から初期資本主義への移行である。この際、ドイツではイギリスとフランスが歩んだ中央集権化への道とは異なり、領邦国家的分裂体制に至る途上にあった。皇帝権の名目化、大貴族 (王侯、領主) の勢力拡張、小貴族 (騎士) の没落、新興市民階級と農民に対する抑圧等が進んでいた。この過程における社会的対立は騎士戦争 (1522—23)、農民戦争 (1524—25) となって現われる。

社会史的背景を重視するヘニングは、ファウスト伝説の生成をこう説明する。彼によれば、「当時の人達は、ファウストの中に、農民戦争等の社会的・歴史的事件が彼らを陥れた境遇からの逃げ道を見出している」⁽¹⁰⁾のである。騎士戦争と農民戦争という二つの戦乱、とりわけ後者がドイツ農民に与えた精神的打撃は大きかった。ドイツ史上例をみない農民の一斉蜂起は、支配層の奸計とルターの裏切りによって庄殺され、10万人の命が失われた。この時確立された支配体制は19世紀まで続き、政治に背を向ける「ドイツの内面性」の伝統が生まれるのもこの時である。反乱失敗後におとずれた反動期に、被支配層はふりかかる弾圧とやり場のない挫折感のはげきをファウストに——史実のファウストが宗教改革や農民戦争にいかなる態度をとったかは不明である——この混乱の時代に、どこにも定住せず、現実を超越して自由に生きた例外的人間ファウストに求めた。すなわち、ファウストは農民の現実逃避のための願望像 (Ausweggestalt)⁽¹¹⁾だったというのである。この場合、話題の中心は必然的に彼の超現実的な魔術に集中し、次第に誇張されて、希代の魔術師像が形成される。そしてその際、自然科学 (= 魔術) の探究に努力した進歩的自由人ファウストに対する庶民の共感もひそんでいるという。

これに対し、ファウスト伝説を「神話的思考による民俗的想像力と科学技術文明の一元論的総合の試み」⁽¹²⁾とみなす見解が提起されている。この見解で問題となるのは、ファウストが扱った魔術、ファウスト逸話でも常に話題の中心となった魔術そのものである。魔術は歴史も古く、古代民間信仰の残滓と考えられるが、この魔術がルネッサンスと時を同じくして、再び隆盛を極めた点に問題がある。

当時の魔術には白い魔術と黒い魔術があった。白い魔術は公認の学問であって、これを学ぶことは尊敬された。黒い魔術は悪魔の助力によって成り立つものとされ、これを学ぶことは厳禁された。当時最も人気のあった魔術は占星術である。アラビアに起源をもつこの学問は、幾何学的天文図の作成、複雑な軌道計算という外見上の科学性に立脚して、そこから生み出される運命の予言は当時の人達に信用された。有力者達は競って占星術師を傭い、自分の天文図を作らせ、予言に耳を傾けた。人間の生死、戦争の勝敗、天変地異、民族の興亡等はいずれも星によって説明された。予言が当たらなかった場合は、悪魔のせいとされた。ここで、悪魔が新たに真実味を帯びて登場する。占星術師は更に悪魔払いの仕事をも課せられることになる。当時の魔術の隆盛は、時を同じくしてしようけつを極めた魔女裁判と並んで、人間解放をうたったルネッサンスの一面である。

こうした魔術の隆盛は次のように説明されている。すなわち、過渡期に共通して云えることは、新旧時代の交代が明確な区切りをつけて行われるのではないこと、いかなる場合にも、旧時代の要素が暫時残るものであること、だから、ルネッサンスという過渡期における魔術の隆盛は中世的思考と近代的思考の妥協の産物とみなされるべきだと。しかし、この説明は結論としては正しいけれども、旧時代の思考が過渡期に隆盛を極めた理由を教えてはくれない。

最近の人類学が教えるところによれば、人類はまったく経験したことがない異質なものに遭遇し、既存の知識体系と何の構造的関係もない新知識の前に自らの構造が崩壊する危機にひんすると、「一種の知的な器用仕事」^{フリコラージュ}⁽¹³⁾が働いて、あり合わせの材料、元来既存の知識体系の構造部分であったものを利用して、まったく別な構造、新しい全体を組み立てる工夫がなされるという。東方に起源をもち、中世末期にアラビアを経てヨーロッパに流入し、次

第に発展した自然科学及び科学技術に対し、当時のヨーロッパ人達が示した反応も同様であった。彼らはこのなじみのない、しかしその成長を阻止し得ぬ、不気味な存在を魔術という昔から熟知した概念でもって把握し、それを扱う者を魔術師という異質な世界と交わる例外的人間のイメージに組み込むことによって理解した。その過程で生まれたのがファウスト伝説である。すなわち、16世紀のドイツ人達は彼らの理解を越え、奇異に思える自然科学者達の言行を、彼らの自然科学に対する感想を混えつつ、逸話の形で語り、次第に伝説へと集約していった。当時一流の魔術師パラケルズスやアグリッパでなく、素生も定かならぬファウストが代表者に選ばれたのは、伝説上の人物が神秘のヴェールにつつまれるのを好む傾向の外に、この伝説の発生母体が庶民であるからであろう。こうして、「近代ヨーロッパは、はかり知れない可能性を秘めている科学文明という未来の時間と、人間に親しいイメージに満ちた過去という二つの異質の時間体験をこういった神話によって総合した」⁽¹⁴⁾のである。自然科学や科学技術がかかる方法で一旦把握されるや、それが在来の魔術よりも幾多の点で大きな力を発揮し、有効性を実証し得たが故に、急速に当時の人達の信用を獲得した。ルネッサンス時代の魔術の流行はかかる観点から理解が可能である。

ところで、ファウストのように二つの異質な世界を仲介する例外的人間を、神話や伝説の領域ではトリックスター (Trickster) と呼んでいる。トリックスターは「あらゆる点で未分化な人間の意識の忠実な模写」⁽¹⁵⁾とも、「無秩序の精神、限界の敵 (法や慣習の限界から外れたところで活躍すること)」⁽¹⁶⁾とも説明されるが、要するに、二つの世界をつなぐ者であるが故に、極めて両義的な性格をもっている。半神半人的で、善悪両面をもち、創造的であると同時に破壊的で、変化自在にして神出鬼没、低次元にとどまる時は単なるいたずら好きの破壊者であるが、高次元においては人類に幸福をもたらす文化英雄となる。ある既存の、それ自体整った規範をもつ世界に属しながら、外の未知なる世界と接触する者は、既存世界に安住する者の目から見れば、例外的人間であり、軽率者であり、大抵の場合悪であって、破壊をもたらすことが多い。その時、彼は敗残者となり、愚か者のらく印を押される。しかし、時には、とりわけ既存世界の規範が時の流れに遅れていたり、硬直化している場合には、彼が正だとわかったり、既存世界に途方もない利益をもたらすことがある。その時、彼は一躍英雄として賛美される。トリックスターはその両方の可能性をもっている。それ故、トリックスターとしてのファウストは両義的な性格で、評価は未定であった。彼は異なる次元の世界と接触する故に生前から、そしてその不審死故に死後は一層、異なるものとの交際を噂されたであろう。その異なるものとは悪魔だったかも知れない。当時は真面目な自然科学者でも、しばしば悪魔との結託を噂された。しかし、ファウストに決定的な悪の評価はまだ下されていなかった。彼は、天上から火を盗んだプロメトイスの如く、悪魔の手から科学を奪って倒れた英雄となる可能性もあったのである。

こうした形で巷に流布していたファウスト伝説を利用して、ファウストを極悪人に仕立てあげたのが新教派グループだったことは、既に言及したとおりである。新教派グループのファウストに対するかかる仕打ちには、彼の生前の無神論的言行に対する反感と、彼が扱う魔術、すなわち、いつかはキリスト教義と対立するであろう自然科学に対する本能的恐怖が起因している。しかし、当面はより現実的な必要に迫られていた。新教の独立に伴う教義の変更は、信者の無神論化への歯止め、神を離れた者の見本を必要とした。さらに、新教は、千数百年の伝統をもつ旧教に対抗するため、独自の説教話を必要とした。ファウスト伝説はこ

のために格好の題材となった。ファウストの庶民の間での知名度、自然科学者の・無神論者の言行、そして不審死。かくして、ファウストは悪魔と結託し、享樂を尽し、悪行をほしいままにし、その結果、悪魔に連れ去られた背教徒、キリスト教徒にとって心すべき実例とされた。それ故、ファウスト伝説はヘニングに云わせると、「ある文学テーマが、革新的進歩階級の文化から成長し、その素材が支配的的反動層の文化にゆがめられて利用された典型的な例」⁽¹⁷⁾であり、別の見方をすれば、庶民の神話的思考によって生まれた伝説が、宗教的イデオロギーによって改ざんされた例である。しかし、この改ざんを受け容れ、自ら強烈な宗教的使命に燃えた編者によって、初めて世に送り出されたファウスト文学が、冒頭に述べた「民衆本ファウスト」、当時の習慣によって、以下の如く長大な名称をもつ書物である。「ヨハン・ファウスト博士の物語。この悪名高き魔術師、呪術師が、いかにして悪魔に一定時を期して身を売ったか、そしてその間にいかなる奇異な出来事を見、みずからそれを惹き起こし、行ない、ついに当然の報いを受けたか。すべての高ぶった好奇心強き神にそむいた人々にとって恐ろしき実例、忌わしき手本、誠実なる警告として、大部分彼自身の著作より集め、印刷に付した。」

注

- (1) *Historia von D. Fausten / dem weitbeschreyten Zauberer unnd Schwartzküstler. Gedruckt zu Frankfurt am Mayn / durch Johann Spies 1587.* なお、この書物の全訳が、道家忠道編「ファウスト その源流と発展」朝日出版社 1974年 に収められている。
- (2) Petsch, Robert: *Der historische Doctor Faust.* In: *Germanisch-Romanische Monatsschrift*, 2. Jahrgang (1910) S. 108.
- (3) Henning, Hans: *Faust als historische Gestalt.* In: *Neue Folge des "Jahrbuchs der Goethe-Gesellschaft"* Bd. 21. Weimar 1959. S. 134.
- (4) こうした資料は、Tille, Alexander: *Die Faustsplitter in der Literatur des 16.-18. Jahrhunderts nach den ältesten Quellen.* Berlin 1900. にまとめられているそうであるが、私はまだ入手していない。以下に引用する資料は、主として注(3)に掲載されたものを利用し、次いで注(2)及び Kürschner 編「ドイツ国民文学叢書」第25巻の *Bobertag* の序文を参行にした。
- (5) Scherer, Wilhelm: *Einleitung in "Das älteste Faust-Buch. Historia von D. Johann Fausten.* Berlin 1884.
- (6) Beutler, Ernst: *Einleitung in "Goethes Werke"* Artemis Verlag 1949. Bd.5. S. 679.
- (7) Reimann, Paul: *Hauptströmungen der deutschen Literatur 1750-1840.* Berlin 1956. S. 611. *Geschichte der deutschen Literatur.* Bd. 4. Volk und Wissen Volkseigener Verlag 1961. S. 418.
- (8) Henning, Hans: a. a. O., S. 138.
- (9) Reimann, Paul: a. a. O., S. 612.
Beutler, Ernst: a. a. O., S. 686.
- (10) Henning, Hans: *Einleitung in "Historia von D. Johann Fausten".* Halle 1963. S. LXIII.
- (11) Henning: a. a. O., S. LIX.
- (12) 山口昌男「アフリカの神話的世界」岩波新書 1971年 8頁。
- (13) クロード・レヴィ・ストロース 大橋保夫訳「野生の思考」みすず書房 1976年 22頁。
- (14) 山口昌男「アフリカの神話的世界」岩波新書 1971年 8頁。

- (15) C・G・ユング 河合隼雄訳「トリックスター像の心理」(「トリックスター」所載) 昌文全書 1974年 264頁。
- (16) カール・ケレーニイ 高橋英夫訳「神話的あとがき」(「トリックスター」所載) 昌文全書 1974年 247頁。
- (17) Henning, Hans : a. a. O., S. LX.

その他の参考文献

- 柏倉俊三：ファウスト伝説考 福村書店 1949年。
- 道家忠道：Faust-Buch についての二三の考察「ドイツ文学」40号 1968年 10-21頁。
- 大沢峯雄：1587年版 Faust-Buch について 名古屋大学教養部紀要第15輯（外国語・外国文学）1971年 251-265頁。
- ハンス・ヘニング 道家忠道訳：ファウスト五百年史（「ファウスト その源流と発展」所載）朝日出版 1974年 1~125頁。
- Fischer, Kuno: Goethes Faust Bd. 1. Die Faustdichtung vor Goethe. Heidelberg 1901.
- Peuckert, Will-Erich: Dr. Johannes Faust. Zeitschrift für deutsche Philologie. Bd. 70. 1947/49.
- Birven, Henri: Der historische Doktor Faust. Maske und Antlitz. Gelnhausen 1963.

Zusammenfassung
Der historische Faust und seine Sagenbildung

Shūzō SEIEN

Das "Faust-Buch" erschien 1587 im Verlag des Frankfurter Druckers Johann Spies. Der Held, von dem das Buch berichtete, war fast fünfzig Jahre vor dieser Veröffentlichung gestorben. Der unbekannte Verfasser des Buches trug in einem Bande zusammen, was über ihn an Anekdoten und Erzählungen umlief. Das Buch ist die erste der Faust-Dichtungen, die sich durch die deutsche Literaturgeschichte wie ein roter Faden ziehen. Um die entstehungsgeschichtliche Bedeutung des Faust-Themas zu verstehen, habe ich hier die Persönlichkeit des historischen Fausts und den Prozeß seiner Sagenbildung klarzumachen versucht.

Der historische Faust war ein umherziehender Astrologe, der beim Volk beliebt, dagegen bei den Gelehrten verhaßt war. Nach seinem Tod wuchs Fausts Bild zu dem des Erzzaubers an und es entstand die Faustsage. Es war nichts anderes als das Ergebnis einer volkstümlichen Denkart. Das deutsche Volk im 16. Jahrhundert wollte die fremde, noch nie dagewesene, aber damals sich entwickelnde Naturwissenschaft durch Vorstellungen der wohlbekanntesten Zauberei erfassen. Der Zauberer Faust war ein Schelm oder "Trickster", der oft in Mythen und Sagen auftritt. Er war doppelsinnig und die Meinungen über ihn gingen noch auseinander. Bei der Faustsage trat aber noch eine andere Umwandlung ein. Der Protestantismus benutzte die Sage, indem er aus dem Faust eine Warngestalt machte, um ihn und sein "abschewlich End" als "schrecklich" Exempel darzustellen. Streng unter diesem Gesichtspunkt wurde das "Faust-Buch" geschrieben.